

ハッターライトにおける宗教的社会化について

坂 井 信 生

(Religious Socialization in Hutterite Society)

Nobuo SAKAI

I. はじめに

ハッターライト (Hutterites) は創設以来470余年にわたり、私有財産制を否定してコミューナル・ライフを実践し、財産共同体 (Gemeinschaft der Güter) の維持を特徴とする、ユニークな宗教的セクト集団である。筆者はこれまでにいくつかの論考を通して、ハッターライト社会に観察される諸問題の若干を公にした。たとえば、「ハッターライト家族の構造と機能」^① においては、コミューナル・ライフを実践するかれらにとり、家族の果す役割のある部分が共同体に委譲されており、一般社会におけるそれとかなりの相違のあることを明らかにし、このセクト集団に特有の永続性の要因について論究を試みた。また、「エスニック・セクトにおける学校教育」^② においては、アメリカのアーミッシュ、メキシコのメノニータスなどのエスニック・セクトにみられる学校教育との比較で、ハッターライト学校教育の伝統保持のすがたを観察した。

本稿においては、これら既刊の拙稿で詳細にのべることのできなかつたハッターライトの社会化とりわけ宗教的社会化の様態を、むしろモノグラフ的に年齢集団別に分って具体的に記述してみたいと考える。社会化とは、簡要に表現すれば、個人の内部に将来成人としての諸諸の役割遂行の要件に不可欠なコミットメントならびに能力を発達させる機能のことである^③。今日、数世紀以前に確立されたその集団内における伝統的社会化のシステムが、近代国家が要請する教育システムとのコンフリクトに直面しながらも、財産共同体にかかわる集団の基本的宗教理念にあくまでも固執し、かつその維持につとめ、潜在的成員である次世代へのその内面化にかなりの成功をおさめているハッターライトのすがたを明らかにすること、これが本稿の目的とするところである。

すでに示唆したことでもあるが、ハッターライト社会は生活共同体であると同時に宗教共同体ということが出来る。したがって、ここで実践されている社会化のプロセスは同時に宗教的社会化のプロセスといっても差支えないと思われる。それゆえ、本稿においては以下「宗

教的社会化」の語を用いて両者の意味を表現することにしたい。

なお、本稿において使用する主たる資料は、いくつかの文献に加えて、筆者がかって調査を実施したアメリカ合衆国のハッタライト・コロニー、サウス・ダコタ州のペンブルック・コロニー、ワシントン州のスポーケン・コロニーなどで得たものである。筆者を受入れ、多くのインフォメーションを提供して下さったペンブルックのデビット・デッカー牧師、スポーケンのパウル・グロス牧師をはじめ、両コロニーの方々に心からの謝意を表したい。

註①『西日本宗教学雑誌』第11号（1989年3月）

②『九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設紀要』第49号（1997年1月）

③T. パーソンズ（武田良三監訳）『社会構造とパーソナリティ』（新泉社、1973年）173頁以下。

II. ハッタライト略史

わが国においては、いまだハッタライトといってもあまり知られていない宗教集団であるので、はじめに簡単に紹介しておこう^④。

ハッタライトは16世紀の宗教改革期に、南ドイツ、チロル地方の再洗礼派によって創設されており、メノナイト（Mennonites）、アーミシュ（Amish）とならんで、再洗礼派の系譜を有する現存するセクト集団のひとつである。ハッタライトという名称は、この集団の創始者とはいえないにしても、初期の最も有力な指導者であり、またこの集団の組織者ともいえるチロル出身のフッター（Jakob Hutter、生年不詳-1536）に由来している^⑤。

宗教改革期のヨーロッパにおける再洗礼派の中心地のひとつはニコルスブルク（Nikolsburg）であり、この地へ迫害をうけた多くの南ドイツ再洗礼派信徒が結集した。さらなる迫害のゆえにこの地を追われたかれらは、かれらがすぐれた農民・職人であることを知ったモラヴィアの一領主の招きをうけ、アウスタリッツ（Austerlitz）へと移動を試みた。その途上、略奪などによる困窮に難渋するかれらは、各自の所有物を提供し合って集団全体の生存を計ったのである。この出来事がコミュニカル・ライフを实践する端緒となるのであり、今日、ハッタライトはこの出来事が実践された年、すなわち1528年をかれらの創立年としているのである。^⑥

1533年、この集団に上述のフッターが加入、各地を巡回して再洗礼派信徒に働きかけるなど、強力なリーダーシップを発揮して集団の組織化に尽力した。3年後フッターはウィーン政府に逮捕され火刑に処せられるのである。その後、アモン（Hans Amon）、リーデマン（Peter Riedemann）がその後継者となり、ハッタライトはモラヴィアにおいてひとつの宗教集団として大きく成長をとげるのである。リーデマンはハッタライトのコミュニカル・ライフの規定を詳細に書き記した『信仰告白書』（Rechenschaft）の著者としても知られている。

この『信仰告白書』は今日に至るまで、ハッタライトの正統な教理的基盤として受け入れられているのである^⑦。

17世紀初頭まで、モラヴィアの領主の保護のもとに2万とも3万とも推定されるハッタライトが、当時 *Bruderhof* と呼ばれていた102のコロニーに居住、農業に加えて製陶、刃物製造、製糸織物などの手工業生産に従事し、まさにハッタライト史上に輝く「黄金時代」(Golden Years)といわれるほどの繁栄をみたのである^⑧。このモラヴィア時代に確立された教育制度をはじめとする諸制度は、若干の変更がみられはするものの、今日のハッタライト社会においても明確に観察することができる。

しかしながら、オーストリア＝トルコ戦争を機に、カトリック教会の擁護者を自任するウィーン政府による迫害の手は、再びハッタライトに棄教と逃避とを強要することとなり、スロバキアからトランシルバニアおよびワラキアへ、さらには著るしく減少したハッタライト(123名にまで激減したといわれている)はロシアへと避難する。1770年女帝エカテリーナ2世が、すでにメノナイト派をはじめとするドイツ系入植者が開拓農業に従事していたウクライナへの入植を許可したからである。ウクライナではメノナイト派の援助をえて、またかれらと密接な関係を保ちながら、一時期崩壊の危機に瀕していた伝統的なコミューナル・ライフを実践する財産共同体の再建につとめ、平和で安定した生活を享受することができたのである。

ところが、1872年にロシア政府はハッタライトをふくむドイツ系入植者に対してロシア化政策を強行、かれらにあたえていたドイツ語による独自の教育制度あるいは兵役免除などの特権を認めた保護政策の撤廃を決定したのである。そこで、ハッタライトはアメリカ合衆国への移住を決意し、1874年にウクライナと農業上の諸条件が類似しているサウス・ダコタに入植、コミューナル・ライフを再編成するのである。サウス・ダコタ到着前後に、かれらはそれぞれの指導者にちなみ、*Dariusleut*, *Schmiedeleut*, *Lehrerleut* の3つのグループ(Leut)に分れてコロニーを建設した。これら3つのグループは『信仰告白書』をはじめとする信念体系、チロル語に若干の外国語が混った言語、社会＝文化的パターンに共通する多くをもってはいるが、それぞれのロイトにあっては、それを統轄する長老(Vorsteher)および戒律をもち、各コロニーの牧師の任命、戒律の修正ないし変更、あるいは紛争などが生じた場合にそれを調停する方策と義務を負う定期的な教役者会を開催している。

アメリカ合衆国入植直後のハッタライトは3つのコロニーに500名足らずであった。しかし、外部社会からの加入者をまったく拒絶しているにもかかわらず、その後急速に成長を重ね、サウス・ダコタ、ミネソタ、モンタナ、ワシントンなどの各州、さらにはカナダのアルバータ、サスカチュワン、マニトバなどの諸州にコロニーを次々と設立し、今日では350をこえるコロニーに、およそ3万と推定されるハッタライトが生産と消費の両活動を共有にするコミューナル・ライフを実践しているのである。

- 註④ハッタライト史の略述にあたっては、John A. Hostetler, *Hutterite Society* (The John Hopkins University Press, 1977) の Part I. *Historical Development* を参照した。
- ⑤ヤコブ・フッターについては、Hans Fischer, Jakob Hutter, (E. T. by W. K. Classen), (Board of Education and Publication, General Conference Mennonite Church, 1956) を参照のこと。
- ⑥この出来事に関する記事は、A. J. F. Zieglschmid, *Die älteste Chronik der Hutterischen Brüder* (The Cayuga Press, 1943), S. 80 にみることができる。
- ハッタライトはこの出来事に由来する財産共同体の形成が、「使徒行伝」2・44-45, 4・32-37に記載されている初代キリスト教会のあり方を範としたものである、としている。リーデマンはその著『信仰告白書』(Rechenschaft)の「財産共同体について」(Von Gemeinschaft der Güter)の項において、上記「使徒行伝」のくだんの箇所を引用しつつ、「神の賜物はすべて——霊的なもの (Geistlichen) だけでなく現世的なもの (Zeitlichen) も——人が自分のみのためにこれを所有する目的で存在しているのではない。ほかの兄弟姉妹とともに所有するものである」「すべての被造物はすべての人々の共有として造られている」「われわれはいう。われわれすべての聖徒は霊的なものの共同体をもっているが、これと同じように、いな、それ以上に、現世的なものにおいても共同体の実践に努力すべきである、と」とのべて、財産共同体の神学的基礎づけを試みている (P. Riedemann, *Rechenschaft*, S. 93-96)。リーデマンの『信仰告白書』については、註⑦を参照のこと。
- ⑦*Rechenschaft unserer Religion, Leer und Glaubens von den Brüdern so man Hutterischen nennt aussgangen* (人がフッター派と各づけている兄弟たちから起ったわれわれの宗教、教理、信仰についての弁明) が原題である。本書は Riedemann (1506-1556) が1540年から44年にかけてヘッセンの獄中で、領主にハッタライト信仰と実践の体系を説明し、この集団の立場を弁明しようと執筆したものである。本稿においては、今日のハッタライトが『信仰告白書』(Confession of Faith) と英語で呼ぶことが多いことから、『信仰告白書』と訳しておきたい。
- ⑧Leonard Gross, *The Golden Years of Hutterites* (Herald Press, 1980). たしかに、モラヴィア時代のハッタライトは「黄金時代」といえようが、むしろ今日のアメリカ合衆国およびカナダにおけるハッタライトは、モラヴィア時代をはるかに凌ぐ繁栄を示しており、「第二次黄金時代」と呼んでも差支えないと思われる。

Ⅲ. ハッタライトのコミュナル・ライフ

われわれは本稿において、ハッタライト社会が宗教的信念にもとづくコミュナル・ライフを実践している財産共同体であることをのべてきた。それでは、かれらは具体的にどのようなコミュナル・ライフを構築し実践しているのであろうか。以下、かれらが営むコミュナル・ライフのすがたを、共同体 (コロニー) と家族のふたつのレベルで観察することにしたい。

(1) コロニー共同体

アメリカに移住した当初は3コロニーであったが、これらのコロニーはおよそ130年間にそれぞれ分封 (branching) を重ね、上述のように、今日では合衆国とカナダに約3万と推定されるハッタライトが350をこすコロニーに居住している。

ひとつのコロニーの規模は10ないし15家族、100名前後である。これ以上の規模になると、

新たに広大な土地を購入し、施設を建設して分封が行なわれる。大体15年から20年の周期である。

コロニーは周辺の市街地からかなりはなれた孤立した場所に、7千エーカーから1万エーカーの農場を所有している。コロニーの中央部に居住棟が数棟、それに食堂・調理場・保育所・学校・教会などの共同棟が並んでいる。さらに、その周囲には牛・馬・豚用の畜舎、鶏・七面鳥などの家禽舎、自動車・トラクター・コンバインなどの農業機械置場、修理工場が配置されている。かれらは多角的な農業を営んでいるからである。とはいえ、かれらは同じ再洗礼派の系を有するアーミシュ (Amish) とは異なり⁹⁾、大型の農業機械を駆使して広大な農場をいたって少くない人数で耕作するという合理的機械化農法を実践している。同様に、畜舎、家禽舎も高度に機械化されており、給水・施肥装置もほとんど自動化され、あるコロニーではすべてがコンピューターで制御される施設すら存した。スポーケン・コロニーでは、約100頭の乳牛の搾乳をただひとりで済ませていた。男性メンバーはこれらの農業関連の部所において労働し、女性は調理・洗濯・菜園での軽労働に従事するなど、性による分業は明確である。

ハッタライトにおいては、すべての権威は神に由来すると信じられている。権威をあたえられている者は下位の者に対して、保護と配慮をおこたることは許されないし、下位の者は権威ある上位者に対して尊敬と服従が課せられる。この権威構造の主たる原理は性と年齢とによっており、女性より男性が、年少者より年長者がつねに上位におかれている。

コロニーの最高指導者は、男性メンバーのなかから投票で選出され、一般に牧師 (Vetter) と呼ばれる説教者 (Diener des Wortes od. Prediger) である。分封に備えて副説教者 (Unterprediger) をおくコロニーもある。牧師はコロニーを代表する最高の権威であるのみならず、日曜の朝礼拝・夕礼拝をはじめ洗礼式その他の諸儀式を司り、説教本を朗読する。ハッタライトには牧師が自ら草案を練った説教の慣習はない。さらに、かれを長とし、コロニーの庶事全般を管轄する実務責任者 (Diener der Notdurft od. Haushalter)、各局部の長 (Meier od. Boss)、それにのちにのべる学校教師 (Schulmeister) などの男性から構成される委員会 (Zeugbrüder) によって、コロニーの運営に、あるいは分封の計画と実施に当るのである。ハッタライトは完全に男性中心社会であり、女性はコロニーの意志決定に何らの公的参与も許されない¹⁰⁾。ただ、住居の割当てや衣服の分配に関してのみが、実務責任者の妻 (Haushälterin) の責任領域となっている。このコロニー組織においては、役職者とそうでない者との間に明確な秩序が存し、下位者はつねに上位教役者に服従しなければならない。礼拝時にこれらの男性役職者は説教者を中心に出席者と対面するかたちで正面に座しており、出席者全員を監視し威圧しているかのようである。

年齢による秩序づけもまた明白である。誕生から2歳までの乳児、3歳から5歳までの幼児、6歳から14歳までの児童、15歳から受洗までの青年、洗礼から結婚までの未婚成人、結

婚後の既婚成人、そして高齢者といった具合に、年齢によるステータス・ヒエラルヒーが明確に確定している。年齢順に定められた共同食堂におけるあるいは礼拝時における座席にそれは明瞭に示されている。

たとえば礼拝時における席は最前列の端から6歳児が、最後列の端には最高齢者が座し、礼拝が終了して退場する際には6歳男子からで最後が男性最高齢者である。続いて同じ年齢順で女性が退場する。全員が退場し終わったのちに、それを見とどけて役職者そして最後尾に説教者の順で退場する。共同食堂においても年齢秩序は明瞭であり、15歳になってはじめて成人食堂で食事をとることになるが、この場合も高齢者が上座に席を占め、15歳の新参者は入口近くの末座に席が指定される。筆者が滞在したペンブルックやスポークン・コロニーにおいても、まず年齢を尋ねられ、「それではお前の席はここだ」と席が指定されたことであった。

メンバーが担当する日々の作業の内容あるいは割当ては、朝食ののちに指示される。各人はこの指示に異論をとることは許されず、ただ服従するのみである。朝8時から12時まで、昼食をはさんで1時から6時まで、かれらは指定された作業を忠実に果すのである。女性の場合、たとえばパン焼きの日などは早朝3時の起床であったりするなど、作業内容によって必ずしも就労時間が一定ではないようである。また、農繁期には夕礼拝を取り止めて、遅くまで農作業を続行することもあるという。

さらに、コロニーには伝統的教育機関である保育所、小学校そして日曜学校が設置されている。これらに加えて、近代国家の要請にもとづく義務教育機関の設置も求められている。こうした教育機関についてはのちにのべることにしたい。

いずれにせよ、コロニーはコミュニアル・ライフを実践するハッタライトの、宗教生活をふくむ日常生活の具体的な場である。かれらがコロニー共同体に対して第一義的優位性を確認しかつ恭順である限り、この共同体によってかれらには「揺り籠から墓場まで」、いな「揺り籠から天国にいたるまで」の保障があたえられるのである。

(2) ハッタライト家族^①

コミュニアル・ライフを実践するハッタライトにあっては、つねに共同体に第一義的優位性があたえられており、家族は共同体に対して従属的価値をもつにすぎない。したがって、ひろく一般にみられる家族の機能とは、当然のことながら、かなりの相違点の存することは容易に推察されうるところである。しかしながら、われわれはすでにハッタライト社会にみられる家族の構造と機能について明らかにしたこともあり、本稿ではその家族のすがたを簡要に粗描するにとどめたい。

ハッタライト家族はコロニーの中心部に建てられた居住棟に住んでいる。平屋の長屋風の建物には大体4家族が居住するが、この建築様式は16世紀ヨーロッパ農村でよくみられたと

いう。若者が結婚すると、この居住棟に平均3室からなる住居を割当てられる。家族の人数が増えれば部屋数も多く割当てられるという。もちろん、住居はコロニー支給である。各戸の入口には鍵がなく、コロニーの人々は勝手に他人の家に入ることができる。筆者がペンブルックやスポーケン・コロニーに滞在した折にも、筆者に割当てられた部屋にゾロゾロと見物人が入って来て、いささか驚いたことであった。財産共有制をとるかれらには、空間的な意味でのプライバシーの観念はほとんどないと思われる。かれらにとって住居は何よりも一日の労働の疲れを治す休息と睡眠をとる場であり、物品を収納する場である。この物品にしてもすべてコロニーから支給されたものであり、とくに個人の所有物は「チェスト」(Chest)と呼ばれる小箱に納められ鍵がかけられている。したがって、施錠していない部屋の物品は共有なのである。すべての食事は居住区のある共同棟の食堂でとられ、食事の準備はその傍らにある調理場で行なわれる。洗濯も共同棟の洗濯場である。かつては、浴室も共同棟にあったというが、今日ではほとんど各住居に設置されている。トイレも同様である。

ハッタライトが一夫一妻制 (monogamy) であるのは当然として、宗教的内婚制 (religious endogamy) をきびしく実践しており、ハッタライト以外の通婚は固く禁じられている。禁を犯せば、かれ (かの女) は直ちにコロニーから追放されてしまう。また、配偶者選択は通例同一のグループ (Leut) 間で行なわれ、異なるグループとの通婚はみられない。ハッタライトは合衆国およびカナダに居住しているが、かれらにとり国境線は何らの障害となっておらず、国境をこえての往来はじつに頻繁であり、通婚もかなりの数にのぼっている。結婚は夫方居住 (patrilocal) であり、新婦は夫方のコロニーに婚入する。したがって、合衆国にあるコロニーの既婚女性にはカナダ生れが相当数存在するし、子どもたちの多くの「行ってみたい国」が、圧倒的にカナダであることも容易に理解されよう。

ハッタライトにおいては、いわゆる産児制限は禁じられており、「産めよ、ふえよ、地に満ちよ」(創世記1章28節)の通りに、夫婦は自然の摂理にしたがっている。完成家族の平均子ども数は10.8である^⑩。これらの子どもが、のちにのべる宗教的社会化のプロセスを経て、やがて正規のハッタライト・メンバーとなるのである。この意味で、ハッタライト家族は潜在的成員のすぐれた補充機関として作用しているといえよう。すでにのべたように、ハッタライトは16世紀再洗礼派に源流をもつ宗教集団であり、成人洗礼のみを承認しており、受洗後でなければ結婚は許されない。ハッタライトに関するデモグラフィックな研究は、1874年から1950年までの平均結婚年齢が男性23.5歳、女性22.0歳であることを示している。30歳をすぎた未婚の男女がいらないわけではないが、離婚は1875年以来1例、別居が4例報告されているという^⑪。ペンブルック、スポーケンの両コロニーの人びとは、まったくそのようなケースはない、と強く否定していた。

ハッタライト家族の機能は、やがて成長してハッタライトの成員となる新しい魂を生み出

し、コロニーが子どもの教育・宗教的社会化に責任をとるにいたるまでの僅かな期間、自らの子どもを養育することにある。この社会にあっては、子どもの養育が私的な営みだとは決して考えられていない。子どもは親のエゴの拡大あるいは対象ではなくして、神の賜物にはかならないし、何よりもコロニーに、そして「キリストの体」である教会 (Gemeinde) に属していると考えられている。のちにやや詳述する予定であるが、子どもは3歳になるまでは家族内で養育されるが、それ以降はコロニーの責任において教育される。かくして、ハッタライト社会における家族の果す機能と領域とは、他の社会におけるそれと比較すれば、いちじるしく限定されているといっても過言ではない。

註⑨アーミシュに関しては、拙著『アーミシュ研究』(教文館、1977)を参照のこと。

⑩Rechenschaft によれば、「支配権 (Herrlichkeit) をもつのは男性であること、女性がか弱く (Schwäche)、悪しく (Schlechte)、服従すべきもの (Untertänigkeit) であること、それゆえに、女性は男性のくびき (Joch) の許にあり、男性に従順でなければならない」とある (S.104)。

⑪拙稿「ハッタライト家族の構造と機能」参照のこと。

⑫J. A. Hostetler, *Education and Marginality in the Communal Society of the Hutterites* (The Pennsylvania State University, 1965), p. 54.

⑬J. A. Hostetler and G. E. Huntington, *The Hutterites in North America* (Holt, Rinehart, Winston Inc., 1980), P. 57.

IV ハッタライトの宗教的社会化

すでに明らかにしたように、ハッタライトが財産共有制つまりコミュニアル・ライフをすぐれた特徴とする宗教=社会集団であり、しかも外部社会からの新規加入を固く拒絶しているかれらにあっては、その集団組織を持続していくためには、当然のことながら、成員補充を集団内部に依拠しなければならない。この目的実現のために、ハッタライトにおいては、潜在的成員ともいえるかれらの次世代を、共同体レベルでの社会化、とりわけ宗教的社会化を通して正規のメンバーに養育する格段の集団的組織的努力が要請されているのである。すなわち、この共同体の成員は、個人あるいは家族にもまして共同体に忠誠を保ち、何よりも共同体の意志に服従しなければならない。個人あるいは家族レベルにおける欲求・関心の重視そして達成は、やがてはコミュニアル・ライフを実践する財産共同体としてのハッタライトを重大な危機に陥れる可能性をふくみもっているからである。

それでは、ハッタライト社会において、この宗教的社会化が目標としているところは如何なるものであろうか。ホステトラーたちは次のように要約している。^⑭

ハッタライトの見解では、個人の意志は圧殺されなければならない。このことは早期

に、とりわけ幼児期に達成され、死に至るまで継続して再強化される。自己実現 (self-fulfillment) に代って自己否定 (self-denial) でなければならない。個人は謙遜であり従順であらねばならない。およそ20年にわたる強力な教化ののち、個人は共同体の教説を意志的に受容するように期待される。罪ある自己と関連する良心の呵責、屈辱、嫌悪感を告白しうるようになったとき、かれは洗礼を志願する。ちょうど一粒の麦が粉に挽かれて一塊のパンとなるように (リーデマン)、個人のアイデンティティは共同体に融合されなければならない。

自己発達 (self-development) でなく、自己放棄 (self-surrender) がハッターライトのゴールである。個人の意志ではなく、共同体の意志が重要となる。大多数にとって善であることが、誕生から死までの人生のすべての段階で統御する。人間の本性は誕生以来罪あるものであるがゆえに、ハッターライトは教育を自己改善の手段ではなく、「神についての知識と神を畏れること」を子どもに移植する (planting) ための手段として位置づけている。神は「自己放棄した人にも働き給う」ゆえに、個人は共同体の意志に従従しなければならない。共同体は神の意志だからである。

要するに、ハッターライトにおける宗教的社会化の目指すところは、次世代をしてすぐれたハッターライト成員に養育することにほかならない。かれらは財産共有制、コミユナル・ライフを實踐する宗教=社会集団であり、したがって、成員のすべてはかれ (かの女) が所属するコロニー共同体を、あらゆる側面において第一義的に優先させなければならない。いいかえると、成員はつねに共同体の意志を他の何ものにもまさって優先させ、個人は自己実現ではなくして自己否定でなければならない、ということである。それゆえに、ハッターライトでは「自己放棄」(Gelassenheit) がことのほか強調される。そして、この「自己放棄」を實現する実践的行為が財産共有制をとる共同体 (Gemeinschaft der Güter) の形成と、そこでのコミユナル・ライフの實踐にほかならない。かくして、この「自己放棄」の内面化こそが、ハッターライトにおける宗教的社会化の目標とする具体的な内容であるといえよう。

次に、われわれはハッターライト社会において實踐されている宗教的社会化のすがたを、年齢別集団に分ってモノグラフ的にのべることにしよう。

(1) 乳児 (0歳 - 2歳)

新生児は神の賜物であるとして、家族はもとよりコロニー全体から祝福される。出産は自宅で行なわれるのが通例であるという。母親は6週間新生児につき添い、コロニー・ワークを免除される。6週間経ち、体力が回復するとコロニー・ワークにもどるが、授乳時には帰宅が許される。母乳で育てるのが最善と考えられており、いわゆる人工栄養は極力避けられているからである。母親不在時にはコロニーの高齢女性が面倒をみ、また少女たちが放課後、

それぞれ割当てられた乳児の世話を担当する。少女たちが乳児の傍らに群がり、競って抱いたりあやしたりする光景はしばしばみかける。この時期の乳児はコロニーのすべて者から愛され、とくに母親の寵愛を一身に集める最も自由で幸せな時を過しているといえよう。かれ（かの女）は成長するにしたいが、次第に自己否定が求められ、コロニーの規範に同調しなければならないし、さらには割当てられたコロニー・ワークに従事しなければならないからである。

ハッタライトは16世紀の再洗礼派の系譜を有する宗教集団であり、生後間もない乳児に小児洗礼を授けることはしない。かれ（かの女）が洗礼をうけるのは、自らが自覚的に信仰告白をすることが可能な年齢、一般には20歳前後になってからである。宗教的訓練は乳児が若干の固形物とを攝取しうようになった頃には、すでに始められるという。母親は赤坊の手をとり、食前食後の祈りを一緒となえる。赤坊は自ら進んで手を組むという。赤坊が朝目覚め、夜眠る時にも、母親は祈りをくり返すという。^⑤

（2）幼児（3歳－5歳）

幼児が3歳になると保育所（Klein Schul）に入る。Klein Schul はドイツ語で小学校の感もあるが、意味は「小さい子どものための学校」であり、しばしば Kindergarten と英訳されるが、むしろ Nursery といった方が実態に即しているので、「保育所」と訳しておこう。

保育所はすでにモラヴィア時代に設置されており、リーデマンは「離乳後ただちに学校（Schul）に収容する」とし、「教会によって任命された姉妹が子どもの世話をする。……子どもが話ができるようになると、その口に神の言をおいてやり、かれらを教え聖書の言をきかせ、祈りや子どもが理解できるようなことを語りきかせる」とのべている^⑥。

今日のハッタライトにおいては、このモラヴィア時代からの伝統にしたがいつつも、3歳から5歳までの幼児を対象とし、乳児は除外されるなど、若手の変更を加えて保育所を維持している。保育所は共同棟の調理場の近くに設けられている。2、3の部屋からなり、その一室は暗くすることができ、ここで幼児は昼寝する。別の部屋は食堂あるいは遊戯室として機能する。高齢ではあるがしかしまだ十分に働ける女性が監督し、若い「教会によって任命された姉妹」が交代制で保母役を担当する。

幼児は母親に連れられて朝7時頃には保育所に来て、母親のコロニー・ワークが終了する6時頃まで留まる。3度の食事も保育所であたえられる。食事時には保母に導びかれて食前食後の祈りをとなえるが、やがてこれらの祈りは暗記されるようになる。保育所にいる間、幼児が遊具を用いて遊ぶすがたをもちろんみることができる^⑦が、それ以上に、さまざまな祈りや賛美歌をほとんど機械的な暗記法で覚えさせられている。リーデマンは「祈りや子どもが理解できるようなことを語りきかせる」とは記している。しかし、筆者のみるところ、

その具体的内容や意味について保母が分り易く説明している様子はいかがわらず、ただ暗記することそれ自体に意義がある、といった印象をうけた。

この保育所における保母の幼児に対する姿勢に、筆者はかなりの興味をひかれたのである。遊具を奪いあったり、大声でどなり叫んだりした幼児に対して、保母とりわけ高齢女性はきびしい毅然とした態度でのぞみ、時には鞭で打つことすらあった。われわれの社会の保育所・幼稚園では、まずお目にかかることのない光景である。かれらは正しい行為を学習させるには、ある程度の体罰をとまなうペナルティが必要であると信じているからである。たしかに、われわれの目からすれば、いささかきびしすぎるとも感じられる。とはいえ、こうしたきびしさのなかにも、いたるところに幼児への思いやりと愛情とが感じられ、あたかも本当の親子を思わせるような光景に出会ったことも、とくに記しておかなければならないだろう。

さらに、保育所において、かれらは幼い年齢であるとはいえ、初歩的な宗教教育とともに、日中の大部分を家族とはなれて過し、コロニー共同体の一員であることの第一歩をも学ぶのである。そこでは可能な限り自己主張は抑制され、その年齢集団の仲間と協調しながら自らがいかに行為するかを学習する。そして、保母の権威を通して親の、またコロニーの権威への服従を体得し、この社会の特徴でもある年齢秩序による階層の最も低いステータスに位置づけられた自己をも確認するのである。他方、母親は幼児を保育所に委ねることにより手を煩わされることなく、調理・洗濯・製縫・菜園作業といった女性専用のコロニー・ワークに従事することが可能とされるのである。

(3) 児童(6歳-14歳)

宗教的社会化の次なる段階は6歳から14歳までである。この期の児童にはコロニー成員としての準備が明確に意図されており、個人がコロニー共同体のために自己放棄をし、共同体の目的に寄与すべき特定の課題を学ばなければならない最も重要な時期でもある。かれらの教育を主として担当し、その責任を委ねられているのは、コロニーによって選任された学校教師(Schulmeister)およびその妻(Schulmutter)である。家族が児童期の子どもに果す役割は最少限に制限されている。

(i) ハッタライト社会において、保育所とともに今日なおみることのできる第二の伝統的教育機関は Gross Schul と呼ばれるそれである。しかし、保育所(Klein Schul)と同じく各称があたえる印象とは異なり、実態は「大きな子どものための学校」であり、むしろ小学校に近いので「小学校」の訳語を用いることにする。ハッタライトの最盛期モラヴィア時代には、この小学校は寄宿制であり、ひとりの教師の手にこの期の学童の教育の全責任が委ねられた。「かれら[学童]はかれらが仕事を習得できるようになるまで、学校で教師とともに過す。そして、時が来ると、その才能・特技にしたがって[仕事に]まわされる。このような教育がなされて、かれらが神を知り、神を信ずるようになると、その信仰告白にも

とづき洗礼がさずけられる」と^⑧。

しかしながら、今日ではそれがかなりの変更を余儀なくされている。のちにのべる英語小学校 (English School) の設置が義務化されたためである。かつては小学校で過されていた時間の大部分が英語小学校出席のために費やされ、その前後あるいは休暇中の午前中に開かれている。この小学校の主たる目的は児童に対する宗教教育とドイツ語教育に限定されてきている。ハッタライトの宗教用語はドイツ語だからである。児童は英語小学校で英語をはじめとする州のカリキュラムに従った教育をうける前に、ドイツ語を読みかつ書く訓練をうけるのである。このように、ドイツ語を主として教えるために、今日では英語小学校 (English School) に対して German School とも呼ばれている。とはいえ、ハッタライトがこの伝統的小学校を依然重視していることに変わりはない。

小学校においては、教育の全責任はコロニーにより選出された既婚男性に委ねられる。教師の地位はコロニーの最高指導者である牧師 (Diener des Wortes) のもとに、実務責任者 (Haushalter) とならぶ重要性をもっており、コロニー委員会 (Zeugbrüder) を構成する主要メンバーのひとりである。日曜の礼拝時には必ず正面ベンチに座して児童を見守り、食事時には子ども用食堂で監督する。食事に際しては、ひとりの女性 (Schulmutter) が加わる。教師の妻が一般的である。かの女は食堂のテーブルに食物と飲物をととのえ、子どもたちの食事を世話し、食事のマナーを教える。かの女はさらに、食堂の清掃、テーブルのセット、皿洗いなどを少女に教えるが、夫である教師の専管領域の宗教教育に立ち入ることはない。少女に女性としての地位と役割を学ばせ、将来のコロニー・ワークの備えをするのである。

教師は児童の信仰とあらゆる生活行為に全責任を負っている。学校での授業中かれは鞭を手にしており、反抗や悪しき行為、注意を重ねても学習態度が是正されない場合など、容赦のない鞭打ちがしばしばみられる。教師に対する反抗は絶対に許されない。体罰のきびしさにはかなりのものがあり、なかには泣き出す子どももいるほどである。この小学校にはいわゆる学年制はないといってもよい。児童はかれ自身の進捗度にしたがって上級の教材があたえられる。6歳児には初歩的ドイツ語読本 (Lesebuch) が、上級になればルター訳聖書・聖書物語そしてハッタライト史 (Geschichtebuch) などがあたえられる^⑨。

6歳以上の児童は、この小学校でドイツ語をほとんど暗記法といってよい方法で学び、聖書の言やハッタライト賛美歌を諳んじなければならない。さらに、ここでは書き方をも練習する。ハッタライトの場合、多くの印刷物をもってはいるが、書物を筆写する伝統をも有している。とくに、礼拝時に牧師によって朗読される説教本の筆写は重要であり、すべての者とりわけ女性はドイツ語の筆記体書法を充分に身につけることが要請されている。この書法を身につけることは、ハッタライト成人女性のひとつの条件でもある。夫が説教者・副説教者に選出された場合には、妻や娘その他の女性が十数冊にも及ぶ説教本を筆写しなければならないからである。

小学校 (Gross Schul) の最大の目的は児童がドイツ語力を充分身につけ、かつハッタライト信仰の基本を学ぶことにある。このことはハッタライト生活の中核的部分であり、これを身につけずしてハッタライト生活を円滑に営むことは不可能に近い。小学校の課程が効果的に作動することにより、メンバーの内部補充は確保され、ハッタライト社会はスムーズに伝統的社会関係と機能が遂行される、といっても過言ではないであろう。

しかしながら、モラヴィア時代のように、教師の責任のもとで「仕事を学ぶ」すがたを今日みることにはできない。とはいえ、児童は放課後指示された部局において、成人たちとともにその年齢に相応じたコロニー・ワークに従事する。小型トラックや農業機械を上手に運転する少年を幾度もみかけたし、なかには施盤機で鉄板を切断したり、溶接技術をすでに習得している少年すらみかけた。指定された乳児の世話、あるいは調理場・洗濯場で成人女性の手助けをする少女たちのすがたはつねにみられた。われわれの社会において、一般には成人の役割と考えられる分野の仕事を、かれらはすでに果しているのである。

児童が15歳の誕生日を迎える前日、教師はその児童を伴ってかれ (かの女) の家を訪ね、両親の前で自らの児童に対する教育の任が終了したことを告げる。15歳の誕生日を迎えた若者は、今や教師の監督のもとをはなれ、肉体的には成人として取扱われることになる。もはや子ども用食堂ではなく、成人用食堂の末席で成人メンバーとともに (bei die Leut) 食事することが許され、コロニー・ワークを遂行する重要な役割を担う一員として遇されるのである。

ハッタライトには、今ひとつ伝統的教育機関として、日曜学校 (Sontag Schul) がコロニーに設置されている。小学校に入学する6歳から20歳前後の洗礼をうけるまで続けられる。しかし、ペンブルックでは教師による監督をはなれる15歳から実施されている。したがって、次項の「青年」のところでも詳しくのべることにしたい。

(ii) 外部社会から相対的に孤立したところにコロニーを設立し、独自の伝統的教育体系を実践しているハッタライトといえども、その児童はアメリカ合衆国、カナダ市民として国家による教育制度の枠内に組込まれている限り、文部当局が実施するいわゆる義務教育を当然うけなければならない。この要請に応じて各コロニーに設置された小学校を、かれらは English School と呼んでいる。授業が英語で行なわれるからであり、とりあえず「英語小学校」と訳しておこう。

英語小学校には6歳から14歳までの児童が通学し、州政府が定めたカリキュラムにしたがった教育が行なわれている。教師は州の教員免状を有する者でなければならないために、ほとんどの場合、コロニーが所在する町の学校委員会推薦による外部からの教師を雇用している。ハッタライトと宗教的に類縁関係にあるメノナイト派信徒であることが多いようである。たとえばペンブルック・コロニーの事例のように、コロニー内に有資格者がいるとすれば、コロニー・メンバーが教師に就任することもあるが、現在ではまだ稀なケースである。この

小学校の校舎（一教室の場合がほとんどである）建築費、維持費そして教師給はすべてコロニーの負担である。

一部の指導者は、ハッタライトといえども外部社会とある程度の交流は必要であり、そのために英語力は必須であるゆえに、子どもに英語を学ぶ機会をあたえるべきだ、と英語小学校を肯定的に評価している。しかし、この見解はむしろ小党派と思われ、多くの指導者は英語小学校のもたらすマイナス面を指摘している。ドイツ語を主体とする伝統的な小学校（Gross Schul）は、ハッタライト信仰および基本的なウェイ・オブ・ライフを教えるのに対して、英語小学校は「この世的知識」を教えるにすぎない、と。さらに、かれらは外部からの教師がハッタライトが禁じている進化論などの近代思想、テレビその他の現代的利器、そして何よりも教師自身のもつ宗教信仰をコロニーに持ち込む危険性をおそれている。そのために、可能な限り通勤の教師を求め、教師住宅を提供する場合でも、それをコロニー居住区のはずれに建築し、危険を出来るだけ防止する方法を講じる。もし、教師の側にこうした危険な動きがみられれば、牧師が即座に厳重注意をするという。

いずれにしても、英語小学校がハッタライトの伝統的ウェイ・オブ・ライフの刷新に、強いインパクトをあたえる可能性をもつことを極端に危惧している。これを避けるために、メンバーを教師に養成、雇用する試みも一部で行なわれており、ペンブルックもその一例である。しかし、英語小学校卒業者が検定試験に合格し、大学通信教育をうけるにはかなりの困難が存しているし、大学を首尾よく卒業したとしても、コロニーに帰らずに離脱するケースもあるようである。したがって、外部からの教師であっても、その教師を可能な限り監視し、かつ自らの教師（Schulmeister）による伝統的小学校における教育を強化・充実させることの方が、現状では賢明な方策であるとの見解が強いように見うけられた。

他方、児童はこの英語小学校に対して、どのような評価をあたえているのであろうか。

筆者がペンブルック・コロニーに滞在した時はちょうど夏期休暇中であったが、教師に依頼して「文章完成テスト」(Sentence Completion Test)を試みた。そのなかのひとつの設問「学校…」(School…)について記しておこう^⑩。

回答した児童は11名である。そのうち、good、fun といった積極的評価が4（すべて少女）、out on May 14 などの中立が2に対して、the worst thing in the world のごときをふくむ否定的評価が5（うち4は少年）であった。教師自身も「子どもたちは英語小学校を余り好きでないようだ」と回答をみて苦笑したことを思い出す。スポークンの教師は外部からのメノナイト派信徒であったが、「コロニーの子どもと町の子どもとは全然違う。知能が低いわけではないが、アチーブメント・テストの成績は話にならない程悪い。しかも、かれらはそれを全く意に介さない」とむしろ嘆いていた。こうした児童のあり方は、文部当局の要請に対応して、不本意ながら設置された英語小学校に対するハッタライトの基本的姿勢を、明確に投影していると思われ興味深い。英語小学校は「妥協」の産物として伝統的教育

機関に併設されているにすぎず、それ以上に宗教教育とドイツ語教育を中核とする固有の小学校 (Gross Schul) に高い価値が依然としておかれているのである。それがハッタライト・ウェイ・オブ・ライフと論理意味的な斉合性をもつからであろう。

(4) 青年 (15歳-洗礼まで)

15歳の誕生日を前にした児童は小学校教師を訪ねる。教師はかれ (かの女) に、忠実なるコロニー・メンバーになること、コロニー・ワークに勤勉に従事すること、年長者の指示に従順に服従することなど、最後の忠告をする。そして、誕生日の前日、教師はかれ (かの女) を伴って両親を訪ね、小学校における教育プロセスのすべてが終了したことを告げ、両親に児童を返すのである。今や、若者は教師の指導と監督のもとをはなれ、一人前の成人として遇され、待ちに待った成人用食堂で成人とともに食事をとることが許される。また、かれらには家族内でも独立した自室と、Chest と呼ばれる個人の所有物を収納する木製の箱があたえられる。この児童の新しい地位に対するコロニーの儀礼的承認の手続きはないようである。

かれらはもはやかつての軽労働ではなく、成人労働者として日常的なコロニー・ワークが割当てられる。朝食後にその日の仕事が指示され、日中その作業に勤勉に従事しなければならない。とはいえ、コロニー・ライフへの準備期間として約2年間は依然見習いの地位にとめおかれ、部局責任者のきびしい監督下におかれる。さらに、他のコロニーに応援労働者として、あるいはゲストとして訪問が許されるのも15歳になってからである。

若者は肉体的には一応成人と認められたとしても、未受洗である限り、宗教的には未熟であるとみなされ、日曜の午後で開催される日曜学校 (Sontag Schul) への出席が義務とされる。一般には日曜学校は6歳から洗礼を受ける20歳前後まで続けられるというが、ペンブルックでは15歳からということであった。『信仰告白書』には記載されていないとはいえ、ハッタライトの間では、保育所・小学校とならぶ伝統的教育制度として承認されている。

日曜学校は本質的には小学校の延長であって、小学校教師 (Schulmeister) が引続き担当するが、スポーケンの事例のように牧師が担当することもある。基本的にはかれらに「自己放棄」をふくむハッタライト信仰の綱要を教えることを目的とし、具体的には『教理問答書』 (Katechismus) の暗記、ハッタライト賛美歌²⁰、午前中の説教の解説などがなされる。

洗礼のための特別教育が入念に実施されるのもこの時期であり、洗礼式に先立つ6週ないし8週の期間行なわれる。16世紀の再洗礼派の伝統にしたがい、ハッタライトは成人洗礼のみであり、女性は19歳から20歳、男性は20歳から26歳までに執り行なわれる。洗礼はハッタライト社会における最も重要な通過儀礼 (rite of passage) ということができよう。宗教的社会化のプロセスが終了して洗礼をうけることによってのみ、この社会におけるメンバーシップが獲得されるからである。すでに十数年にわたり、いわばこの通過儀礼の準備としての

宗教的社会化のプロセスを体験してきた若者は、洗礼志願に関しても両親の説得は不必要であり、時期の早い遅いはあっても自発的志願が通例であるという。

他方、この時期の青年たちには、ある程度の逸脱が許容されているふしが観察される。フルメンバーとしての多くの制約が待っている洗礼を前に、許される最後の「自由」を満喫しようとするのか、他の年齢層にはまったくみられない自由な行為を散見したからである。といっても、われわれの社会でみられるいわゆる非行というようなたぐいではなく、むしろささやかな逸脱という程度の行為であるにすぎない。その一、二の例を記しておこう。

筆者はハッターライト調査にテープレコーダーを持参し、小学校の授業の有様などを録音したのであるが、このことを聞きつけた青年が筆者のもとに来て、テープレコーダーを借してほしいという。ヒット・ソングのテープをもっているから聴いてみたい、と。かれは同輩グループとテープを聴いたのち、しばらくして返してくれた。ところが、翌日早速筆者は牧師に呼び出され、今後絶対にそういうことのないように注意してほしい、と散々油をしばられた。小学校教師はテープレコーダーでの録音を許してくれたのに、青年に対しては禁物らしい。それとも、ヒット・ソングを聴くことがご法度なのか、理由はよく分らない。また、ある夕礼拝（Gebet）の後のことである。数名の若者と一緒に小型トラックでコロニーの広大な農場を走り廻ったことがあった。かなりのスピードで、時には事故を起すのではないかと、いささか危険を感じるほどの無茶なスピードであった。それは、あたかも抑圧され、あり余ったエネルギーをここぞと発散させているかのような印象をあたえるものであった。若き女性たちも、たとえば指環やマニキュアなど若干の逸脱があるとは聞いたが、直接それを確認する機会はなかった。

洗礼は一般にイースター前の「枝の主日」（Palm Sunday）に行なわれるが、時には「聖霊降臨主日」（Pentecost）の場合もあるという。洗礼を前にした志願者は、牧師による最後の入念な特別教育をうける。この期間、かれらはことのほか自らが謙譲であること、自己を完全に放棄してコロニー共同体へのまっつき服従の意志を証明しなければならない。コロニーのすべての先輩メンバーはかれらを注意深く見守り、必要とあれば助言・忠告を惜しまない。

洗礼式前日の土曜の午後、志願者は牧師をはじめとするコロニー委員会のメンバーたちから、その信仰について試問され、さらに『教理問答書』のなかからの質問がくり返される。志願者は日曜学校であるいは特別教育を通して『教理問答書』の設問（Frage）と回答（Antwort）を暗記しているので、その質問それ自体にはさほど困難を感じることはないが、ともかく極度に緊張するひと時であるという。また、長年かれらの宗教教育を担当した小学校教師が、この時ほど緊張することはない、としみじみ語るのも興味深い。このテストに合格した志願者が、翌日の日曜の午後に執行される洗礼式において洗礼をうけることになるのである。

洗礼式は「枝の主日」の午後、コロニーの全員が出席する教会で執り行なわれる。牧師は定められたいくつかの質問を志願者にする。この質問のなかには「汝は汝の魂、身体そして汝の所有するすべてを、天にいます主に捧げ、あたえ、犠牲とし、またキリストとその教会に服従せんことを願うか」という、ハッタライト信仰を象徴的に表現する質問もふくまれている²⁰。もちろん、志願者は「然り」と答えなければならない。そののち、補助者（副説教者の場合が多い）の助けをえて、牧師は「汝の信仰にもとづき、父と子と聖霊のみ名により、我汝に洗礼を施す」と、ひざまづいた志願者の頭におき、水をそそぐ。ハッタライトでは浸礼ではなくて、滴礼方式が伝統にかなった方法である。

洗礼を受けたのちは、男性は正規のメンバーとしてコロニー共同体の意志決定に参加し、役職者選出のための投票をする特権があたえられる。もちろん、日常的なコロニー・ワークにおける責任ある役割が課せられることにもなる。女性の場合、コロニーの意志決定や投票に参加することが許されないゆえに、地位の上昇といった明確な変化はみられない。しかし、受洗した若者は他のコロニーでの結婚式や葬儀への参加が許されるし、ある一部のコロニーでは、新たに受洗した青年たちがとくに母体コロニーなどを訪問旅行する慣習があるという。

洗礼はたしかにハッタライト社会における最も重要な通過儀礼といって差支えない。十数年にもわたる伝統的な宗教的社会化のプロセスは、まさにこの通過儀礼である洗礼にいたる周到な準備期間にはかならない。そしてまた、洗礼は何よりも結婚へのステップともみられている。受洗者でなければ、結婚は許されないからである。洗礼と結婚との時間的間隔はあまり長くない方が理想とされ、結婚を真剣に考えるまで洗礼を受けない若者もいるという。洗礼はうけたもののいまだ結婚していない若者は、未受洗者集団にもさりとして既婚者集団にも所属できない、まさにマージナルな存在である。未受洗者であれば筆者が散見したような逸脱が大目に見過されるとしても、受洗して正規のメンバーとなったかれにはもはや適用されることはない。他方、受洗した既婚者であれば、コロニー共同体の役職者や部局責任者の地位に就くことができるにもかかわらず、かれは受洗したとはいっても依然未婚者の地位にあるからである。結婚することにより、かれはコロニーの完全なフル・メンバーシップを獲得することになり、コロニー共同体の役職者として大きな指導性と責任を果す可能性をもつ存在となるのである²¹。

註²⁰J. A. Hostetler and G. E. Huntington, *ibid.*, p.109. ハッタライトにおいて最も強調される教理は、この「自己放棄」(self-surrender, *Gelassenheit*)である。すなわち、「自己を放棄して神の意志に完全に服従する」ということであり、その *Gelassenheit* を実現するための具体的実践行為が財産共同体 (*Gemeinschaft der Güter*) の形成とそこでの生活実践である。つまり、*Gelassenheit* は「最も価値ある愛の形態であり、神の霊、永遠の思寵そして人間の物質的資源のすべてが美しく成員に分与される」という財産共同体の形成とそこでの具体的日常生活、すなわち、コミューナル・ライフにおいてのみ実現されるということである (P. Riedemann, *Rechen-schaft*, S. 92)。なお、*Gelassenheit* については、Robert Friedman, “*Gelassenheit*”, *Men-*

nonite Encyclopaedia, II, p. 448ff. (Mennonite Publishing House, 1956) を参照のこと。

⑮ペンブルック・コロニーの母親は、赤坊の就寝時に次のような祈りを一緒にする。Ich bin klein. Mein Herz ist rein. In Jesu Namen, Schlaf ich ein. Die lieben Engelein werden mein Wächter sein, Amen.

⑯P. Riedemann, Rechenschaft. S. 140.

⑰ハッターライトの保育所で使用されている遊具のほとんどは、ハッターライトと密接な関係をもつ宗教集団 Society of Brothers の一共同体、ニューヨーク州リフトンに所在するウッドクレスト共同体 (Woodcrest Community) において製造されたものである。Society of Brothers に関しては、拙稿「一コミュナル・セクトにおける社会化について」(『哲学年報』第43輯、1984年)を参照されたい。

⑱P. Riedemann, Rechenschaft, S. 141.

⑲ペンブルック・コロニーの教師 Jacob Decker 氏によれば、1980年にカナダのマニトバでマニトバ・ハッターライトのドイツ語教師 (Deutsch Lehrer) が集り、授業計画 (Lehrplan) を作成し、その進度にしたがって使用するべきテキストを決めたが、現実にはあまり実践されていないという。ペンブルックで使用されているテキストは以下のものである。

Deustsch=Englische Fibel, Erstes Lese-und Gesangbuch

Biblische Erzählung für Anfänger

Biblische Geschichten

Geschichte=Buch der Hutterischen Brüder

Lieder=Büchlein für Schul-Kinder

⑳「学校」以外にも両親 (父、母)、労働などの項目にわたりテストを試みた。ハッターライトとアーミッシュ児童の比較に関しては、拙稿「セクト児童の研究——「文章完成テスト」を通してみた——」(『西日本宗教学雑誌』第7号、1985年)、さらに、メキシコにおけるメノニータス (Menonitas) 児童を加えた比較研究に関しては、拙稿「メノニータスにみられる社会化について」(『1983年度メキシコ海外学術調査報告』九州大学文学部、1985年)、273頁以下を参照のこと。

㉑ハッターライトの『教理問答書』には2種類あり、児童には *Kreuze Fragen für Kinder in der Schule* が、青年には *Einige Frage und ihre Beantwortung für die reifere Jugend* が、それぞれ使用されている。とくに、後者はモラヴィア時代にリーデマンの後継者となったワルポット (Peter Walpot, 1521-78) によって執筆されたという (スポーケン・コロニーの Paul Gross 牧師による)。

青年にあたえられる讚美歌は、*Gesangbüchlein, Lieder für Schule und häuslichen Gebrauch* である。

㉒J. A. Hostetler, Hutterite Society, Appendix 7, Baptismal vow (p. 337-8) による。

㉓ハッターライト社会で観察される婚姻に関する詳細 (たとえば、配偶者選択、結婚式、結婚生活など) は、すでに拙稿「ハッターライト家族の構造と機能」においてのべたので、本稿では割愛することにする。

V. むすびにかえて

本稿において、われわれはハッターライト社会に観察される宗教的社会化のすがたを、年齢集団別に分ってモノグラフ的に明らかにしてきた。ハッターライトは500年近くの長い歳月にわたり、宗教的信念にもとづき、コミュナル・ライフを実践する財産共同体を維持してきたユニークな宗教=社会的集団である。創設当初は積極的に伝道活動を行い、成員補充を外部

社会に求めたとはいえ、迫害の激化にともない閉鎖的集団と化していき、次世代成員を集団内部からのみ補充する方策を採用するにいたっている。この目的のために、この集団の宗教的理念を体得し、コミュニアル・ライフ実践に適応する潜在的成員の養育に集団的努力を重ねることになるのである。その成果が、本稿において明らかにした宗教的社会化のすがたであるということができよう。

ハッタライトにおける宗教的社会化が目標とするところは、「自己放棄」を成員ひとりひとりが内面化することにある。財産共同体の成員であれば、かれらは他の何物よりも共同体それ自体を優先しなければならない。もし個人そして家族の欲求・関心が優位を占めるとすれば、当然のことながら、共同体とのあいだに深刻なコンフリクトを招来しかねない。したがって、成員たる者には自己放棄をなし、共同体に絶対的服従をすべきことがこのほか求められるし、そのこと自体が神への服従として理解されている。ハッタライトにあっては、このことがすでに幼少時より課せられているのであり、再洗礼派の伝統である成人洗礼にいたるまで継続して学習し、かつ内面化していかなければならない最重要課題なのである。

乳児期において、早くもすでに、乳児は日中のわずかな時間であるとはいえ、コロニー・ワークに従事する両親の手から離され、コロニー共同体の年長者の世話をうける。幼児はモラヴィア時代から設置されている伝統的な「保育所」で日中を過し、この年齢に応じたハッタライト信仰の初歩を学びつつ、共同体の幼き一員として共同体における自らの占める地位を確認する。他方、両親は幼児に手を煩わされることなく、存分にコロニー・ワークに専念することが可能となるのである。

自己放棄の内面化のための本格的教育が共同体の主導で積極的に施されるのは、児童期の6歳に入ってからである。コロニーによって選出されたひとりの男性教師が全責任を負って、これも伝統的な「小学校」においてこれを担当する。今日では、国家の要請にしたがった初等教育機関にそのある部分が委譲されてはいるものの、本質的部分である宗教教育はモラヴィア時代以来の伝統的システムで実施される。ここでは、ハッタライト信仰の基本的綱要、そしてハッタライト信仰に不可欠のドイツ語が教えられるのである。小学校を卒えた若者は教師の指導監督をはなれ、肉体的にはひとりの成人として遇され、コロニー・ワークに従事することが求められるとはいえ、宗教的には未熟なる者として、さらなる宗教教育が課せられる。つまり、日曜学校教育であり、自己放棄の内面化の最終的な仕上げ段階といえよう。この入念な教育のプロセスを終え、コロニー指導者たちによるテストに合格した者が、まさにハッタライト社会における最も重要な「通過儀礼」ともいうべき、洗礼という宗教的社会化のゴールにいたりうるのである。

今日のハッタライト社会を観察する限り、本稿においてモノグラフ的にのべた宗教的社会化のプロセスは、いたってスムーズに作動している事実をうかがい知ることができる。それゆえにこそ、1870年代にウクライナから移住した500名足らずのハッタライトが3つのコロ

ニーを設立して130年を経過した現在、外部社会からの加入者を拒絶しながらも、約3万と推定されるかれらが350にもおよぶコロニーに居住し、コミューナル・ライフを実践する財産共同体を維持しているのである。この事実は、ハッタライト社会における成員の内部からの補充がいかにか、効果的に作動しているかを示すと同時に、脈々と継続されている宗教的社会化のすぐれた成果であると評価しなければならないであろう。

とはいえ、ハッタライトといえども、アメリカ合衆国、カナダといった近代国家市民のひとりである。ハッタライト固有の伝統的教育制度をふくむ宗教的社会化のプロセスが、国家による義務教育制の要請と種々の面でコンフリクトを生ぜしめていることも事実である。さらにまた、現代の先端科学技術の急激な進歩が、かれらの農業経営に多大の影響をおよぼす可能性もなくはない。遺伝子組み換えによる新品種の出現と改良、コンピューター操作による農業機械の高度化など、かれらが伝統的教育制度に固執するとすれば、対応に大きな困難を感じざるをえない課題が山積することにもなるであろう。

われわれは早急な結論を急ぐべきではない。しかし、ハッタライトはその集団の理念にとり、重要であると認識される中核的ないし本質的部分ではない周辺部分においては、ある意味では積極的な刷新の試みを取り入れられている、との指摘がある。すなわち「統御された文化変容」(controlled acculturation)の方策を賢明に採用している、ということである^②。われわれはこの指摘にみられるように、宗教的社会化の領域においても、とりわけ国家・文部当局の要請によるいわゆる「英語小学校」を適切にコントロールし、伝統的な固有の教育制度をさらに充実しながら展開させることを通して、この社会の永続性が図られていくのではないか、と考えるのである。

註^②Joseph W. Eaton, "Controlled Acculturation", *American Sociological Review*, 1952, 17.